



『哺乳類学』

小池伸介・佐藤 淳・佐々木 基樹・江成広斗 著

2022年7月  
東京大学出版会 発行  
416頁  
定価 4,400円（本体 4,000円＋税）

浅川満彦（酪農学園大学）

獣医学が人類にとって最重要な産業動物および伴侶動物（以下、典型的動物）を対象に発展してきたサイエンスであることは自明である。もちろん、典型的動物は哺乳類ではあるが、だからと言って獣医学が哺乳類の全般に同じ熱量で向き合っているわけではない。生物多様性や後で述べるワンヘルスといったワードが、獣医学でも喧しい現状では、ちょっと情けない。いやいや、この場

合の「全般」とは、現生種約4,500全てと無茶を言っているわけでは断じてない。せめて、哺乳類が擁する全分類目・科の代表的属種については、典型的動物と同程度に扱ってほしいという愚痴に近い夢想である。

動物タクサの範囲に加え、純然たる応用科学の雄としての獣医学が扱う現象も非常に限られ、生態・進化など個体外の現象(究極要因)はほぼ扱わない。疾病の診療・診断・予防を扱うことを目的にした獣医学では、まず、個体内のモノゴト(至近要因)を対象にするのは、まあ、仕方がないのだろう(以上、浅川, 2021)。

しかし、である。獣医学教育モデル・コア・カリキュラム(以下、コアカリ)に野生動物学が組み込まれてしまったことに加え、ワンヘルスという自然生態系の健康にまでも視野を広げることを求められてしまった昨今、獣医学が、典型的動物の個体内にのみ留まることは難しいのではないのか。

タクサ問題ではこういう事情も加味された、年々厳格化されつつある「動物の愛護及び管理に関する法律」(以下、動物愛護管理法)では、エキゾチックペットのような典型的動物以外のタクサ群も対象とされた。そのため、法規上、獣医師は皆、動物愛護管理法の主眼の一つである虐待証明をこういった動物に対してさえ、適切に行う技量が求められているわけだ。

以上のような事態から導き出される結論の一つは、せめて哺乳類全般についてだけは強くなるよう! である。動物愛護管理法では、鳥類や爬虫類も含むが(注:この法律対象のタクサは愛護動物と称される)、これら両群は、哺乳類全般を押さえてからにさせてもらおう。あまり時間的な余裕は無い。動物愛護管理法は生きていて、既に逮捕者も出ているのだから。

前置きがとても長くなってしまったが、このような切迫した状況で、本書の登場は、絶好の機会であると感じている。本書は進化・形態・生態・保全のパートに分かれ、それぞれに4つの章で構成されている。これらに先んじて序章では哺乳類学の定義が明示されている。そのサイエンスが示す内容を、本書のようにコンパクトにした努力は並々ならぬものであったはずだ。しかし、このコンパクトさが、獣医学部の現役学生や獣医師たちが自習する際の縁となる。もちろん、コンパクトであっても、内容は過不足なくバランスが取れ、これは章題だけを一瞥しても判る。中にはコアカリ野生動物学で指定された大項目も散見され、そういったモノゴトに関して有益な自習資料となる。念を押すが、野生動物学がコアカリに指定された故、齊一的に教育されないとならないのである。このニュースレターを読む学生諸君は、獣医学徒なら、

すべからく野生動物に興味を持っているはずと思い込んではいないだろうか。確かに、相当多くの学生さんが興味をお持ちなのは確かだが、その興味の度合いも濃淡があるし、興味の方向性(とにかく救護! とか、いやいや動物園で! などなど)も人それぞれである。中には、まったく関心がない方もいらっしゃる。そういう方々と授業で対峙する際、せいぜい共用試験に問われる程度の基礎情報は受け、あとは各個人の関心度に任せる、要するに自習しかあるまい。

また、コアカリではほとんど扱われない日本産在来種の種構成、生物地理、生態関係などについて豊富な図を用い丁寧に解説されている。このあたりも、「taxa by taxa 式の知識蓄積は、ご自分で。何しろ大学生なんだから」ということなのだろう。いわゆる、自然史(いや、博物誌)的なモノゴトの全てが蔑ろにされている現状で、自助努力はきついであろうに…。そもそも、在来哺乳類の進出・分布の歴史的な過程を知らずに、歴史性を無視した存在、すなわち外来種による危険性が如何に深刻なのかを理解するのは難しいのではないのか。

形態のパートは、本学会でも活躍される佐々木教授が執筆され、これまでのコアカリ教科書とはほぼ重複しない新鮮な内容(たとえば、樹上適応やエコロケーションなど)を著されていた。ほぼ全ての目科の代表種が網羅された歯式の一覧表は、獣医歯学という資料としても重宝されよう。

もし、ボリュームを含め本書のような形式で、他の愛護動物となる爬虫類や鳥類の書籍が編まれると、自習に頼らなければならぬコアカリ野生動物学の現状では、頼もしい援軍となるだろう。今後に期待したい。

#### 引用文献

浅川満彦. 2021. 野生動物医学への挑戦・寄生虫・感染症・ワンヘルス, 196pp, 東京大学出版会, 東京.